
日陰のララバイ

さるやま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日陰のララバイ

【ZPDF】

Z4032P

【作者名】

さるやま

【あらすじ】

ただ、淡々と終わるはずの夏休み、しかし今年の夏は違つていった。何もない田舎で起こった。大事件、裏でまさかの自分が関与。ここにあの日が蘇る。

プロローグ（前書き）

初めてです。頑張ります。

プロローグ

暑い。携帯電話の画面にはAM9：48分と表示されていた。八月は朝から暑かつた。すでにこの時間で気温は27

ただそこに立っているだけで汗が流れ落ちるのを感じるほどだつた。長い上り坂を原付を押しながら歩くには、すで限界に近い体力である。一日酔いの僕には、死さえ近い気分なのだ。交通はまばらで二台に一台は軽トラ。

聞こえてくる音はセミの声と川のせせらぎ、風で木の枝がこする音が寂しく響くだけ。僕は昨日の自分にかなり反省していた。

「あのビールで最後にするんやつた。」

独り言が虚しい

ポケットの中の携帯から（ダース・ベイダーのテーマ曲）が流れているのに気付き、ためらいながらも電話をとつた。相手は今年で四十三歳になる母からだ。

「あんた何しゅんで、さっさと帰つてき。十五分以内に。」

耳をつんざく声は、それだけ言い残し電話を一方的に切つた。こんなに空はギラギラと晴れわたつているのに、なぜ自分の所にだけ雷が落ちたのか不思議でならない。

まあ、原因は分かっているのだが、自分の汗が先ほどから尋常でないには、夏のせいだけでは無いようだ。

十五分つて家まで走つても二十分はかかるんですけど。ガス欠の原付はあてになりそつともない。一発目の雷を想像しただけでゾッとする。

家に帰り着いた時には、服から汗が搾れるほどであった。

ジャリッ、砂利をジャリッなんつって。家の庭の砂利を踏みつけて後から気配がした。否、すでに体を動かせないプレッシャーを掛けられている。間違いなく我が家のダース・ベイダーである。

「あんた今まで何処におった。」

「はい、少々、友との会合・・・。」

僕が全ての言葉を言い終える前に、

「今がどんなに大切な時期か分かる。高3で高3。あんた大学どうするつもり、浪人は許さんで。」

言い返す言葉もございません。

僕は酒を飲んだことがバレないよう息を殺して忙しいのです。しかし、さすが母

「クサツ、酒臭いし汗臭い。さっそくシャワーに行き、怒る氣も失せた。」

いや、すでに怒つてますよ。

母はため息をつき、呆れた表情で家に入つていった。自分も後をつける形で家に入った。タオルを取り、洗濯機に服を突っ込みシャワーにはいる。

やはり、体力の限界。なんとも表現出来ない眠気がやつてくる。徹夜の疲れも今になつて出てきた。

シャワーを終えた瞬間に、三発目になる母の雷が、また落ちた。

「もう遅い。今日は市内に行くつて言つたう。自分で行くつて
言つて、もう置いていくで。」

どうも母の声は頭が痛くなる。少しは僕の体もいたわって欲しい。
しかも、せっかちである。

短気になつたな母上も

ボソッとした音にもならない心の声。

「あんた何か言つた。」

母は何でも息子のことが分かるのだろうか。おおーーーわあ

そして、市内に向かう車の中、少しづつ少しづつ、僕の夏休み
は変化し始める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032p/>

日陰のララバイ

2010年12月10日07時29分発行